

## レジャーを考える

(昭和50年1月22日受付)

関東学院大学 三 隅 達 郎

昭和39年10月、あの東京オリンピック大会開催の直前の数日間、大阪市を中心とした近畿地区において、国際レクリエーション協会（現、世界レクリエーション・レジャー協会）、日本レクリエーション協会共催のもとに、諸外国から300余名の代表を迎えて開催された、戦後第1回世界レクリエーション会議において、全体会議の席で、私は意見発表をさせられたが、その中で、「英語のレジャーに当る日本語は余暇の二字である。有り余った暇という意味であり、更に余暇は自由に使うことのできる時間という、自由の二字を誤って受けとめるという二重錯誤から、国民は往々にして誤った理解に気づかないでいる、云々」と云ったことをおぼえている。以来10年、余暇、レジャーという文字に対する真の理解度は一部の人たちを除いて、今尚満足できるものだと言え切れない有様にあるし、レジャーとレクリエーションの概念についても多くの混乱が見られる。

例えば、ある私鉄で貼り出されていた「沿線レジャー・ガイド」と大見出しをつけたポスターの中味が、釣、芋ほり、ハイキングや今流行のオリエンテーリングの案内であったり、また、あるテレビ放送局が「空のレジャー」という画面を流した時、そのプログラムの中味は、ある私立飛行訓練学校における小型単発航空機の操縦資格を取得するための訓練状況であったりした。

和英辞典には、「余暇」の項に「レジャー」の文字が見られる。レジャーという文字の語源

がラテン語のリケーレであること、そしてリケーレには遊ぶという意と学ぶという意とふたつの意味があることは、既に誰でもが知っていることである。従ってリケーレは英語において、一方にはレジャーとなり、他方ライセンス（免許証）やリセンシエートなどの文字となっていることも、今更云うまでもないことである。蛇足のようなが、序に云うならば、ギリシャ語のスコレーにも、リケーレと同様に、「遊ぶ」と「学ぶ」の両方の意味がありながら、英語では学校、学識経験者などの単語となっはいるが、遊び即ちプレーという文字やレクリエーションの文字などとは何らの関係もないらしい。これは勿論その道の専門学者にご教示願うより外はない。

さて、ラテン語のリケーレとレクリアーレとの間に、その受けとめ方に、どんな関連や相違があったのかは別として、少なくとも「リケーレ」についてのみ考えるならば、釣、芋ほり、ハイキングやオリエンテーリングなどは、現在ではレクリエーション活動と理解されているから、前述の「沿線のレジャー・ガイド」の文字には、レジャーとレクリエーションについて、安易に用語を用いたという混乱が見られるし、一方、「空のレジャー」については単発小型機の操縦資格を取得するための活動と云ってよいから、レジャーについての用法は間違っていないというべきであろう。実のところ、過去のある時期には、私自身がこの「空のレジャー」の文字を不都合だと思っていたのだから、私自身にも混乱のあったことをここに告白しなければ

ならない。

余暇という文字が悪いのだと、文字に向って悪口雑言を並べて見ても意味のないことである。余暇に対する人々の態度が問題なのであって、余暇の二字をどんな文字に改めてみても、余暇に対する価値の重要さを確認しない限り、何の意味もないのである。

カリフォルニア州立大学のD.E.グレイ博士は「レジャーと呼ばれる異質なものを内蔵するもの」(This Alien Thing Called Leisure)と題する小論文の中で、レジャーをそれが内蔵する異った性質に従って、三種類に分類できると説明している。彼によると、レジャーⅠはウェブスター大辞典が解説しているものや、同じく1934年にオット・ロムニーによって示された、人間の時間は生存のための時間、生活維持のための時間と余暇とに大別できるとする考え方などを引用しつつ、自由な時間帯としてのレジャーの概念であるとする。レジャーⅡについては、彼はセバスチャン・ド・グラチアが唱えたと伝えられるものに従って、ギリシャ人の考え方によるスコレーの内容と同一の意味を持つという考え方を引用しつつ、審美的、心理的、宗教的、哲学的思考の行動であるとし、またロバート・リーがその著書「アメリカにおける宗教とレジャー」の中で云っている如く、研修と自由、成長と表現、休養と恢復、生活の再発見の場であると規定しつつ、その受けとめ方について、レジャーは沈思黙想的なものであり、仕事や時から解放された心の組み立てや生活のスタイルであるところから、人間のある状態を指すものであるとしている。レジャーⅢは反実利主義的なもので、演劇評論家ウォルター・カーの著書「娯楽の衰微」の中に一貫して流れている思想であるところの、実利的な活動のみが価値あるものであるとする思考の否定である。この考え方は人間の精力発散によっ

て有用な結果を得るものでなくてはならないということを拒否することにもなる。また価値の唯一の発生源としての仕事に対する倫理を否定し、自己の活動行為は自己表現以外の何物でもないということを許容するものであり、これは歓喜を受容し、快楽を追求する。即ちレジャーはそれ自体価値あるものであるとする結果、心の状態であるというべきものであるとしている。

以上の如く、レジャーⅠは無条件の時間的観念を強調し、レジャーⅡは人間の古典的な思考状態を意味し、レジャーⅢは歓喜を重視して、自己表現を強調し、価値の唯一の要因としての実利主義を否定する。

大多数の人たちは暗黙の合意によって、常套手段的な生活様式に従わせるよう誘導することもできるが、とにかく個人的人格が自己を主張することとなる。われわれの社会では、殆んどの人にとって、個人の自己表現はレジャーの中に発揚される。レジャーは無精神的なものである。道徳的、非道徳的何れにもなりうる用法にある。多くのレジャーによって、生活そのものを真に快的なものとするためには、人間の性格と宇宙におけるその位置に対する、すべての概念を改めねばならない。莫大な恩恵を結実させるためには、レジャーが基礎援助となりうるし、われわれはそれが異質のものであるというだけで片づけてしまうことを止めねばならない。社会は常にレジャーの用法の上にかんがりのコントロールをしかけてきたし、今後もなお継続するだろう。しかし、われわれは慎重な上にも慎重に、これらのコントロール作用を上手に活用すべきであり、真の指導は管理力の助長を意味するものであってはならない、と結んでいる。

彼のいうようにレジャーは三つの異質なものを包含するという理解に対し私は賛成したい。そして彼のいうレジャーⅡ及びⅢの活動がいわゆるレクリエーションを意味するものであると

受けとめるべきだと思う。しかし彼のいう三種に分類することは、アメリカ人としての生活態度においては、そのまま無条件に適応するだろうし、充分説明もつくであろうが、われわれ日本人にとっては、それだけで済まされないものがあるように観察され考えられる。

われわれ日本人は安易に、且つ勝手にレジャーの文字を乱用してきた。そのひとつの因とも思われることは、われわれは概して流行という名のバスに乗りおくれまいとして、何にでもとびつく、短所とも思われる傾向が多分にある。用語ばかりでなく、日常生活の中にもそれが見られる。今でこそある程度過去のものとなりつゝある夏の軽井沢行、毎夏繰り返される海水浴場の超混雑、ボーリング場の繁盛、ゴルフ場の乱立、その他挙げ出せば際限がない。すべて猫も杓子もの表現そのままである。人々は自己の自由意志の選択に従って余暇を楽しんでいるのだと反論するに違いない。しかし簡単にその云い分を肯定してよいのだろうか。人が行くから、人がやるから、自分もという気持が全然無いとは云い切れまい。また大資本による商業レクリエーションにいつの間にか踊らされているという要因が皆無だと断言できないのではなかろうか。これがわれわれ日本人の一面である。

このように表面は各自の自由選択による活動と見られるものでも、実は群衆心理に左右され、流行という名のバスに乗りおくれまいとすることに起因するものを、レジャーⅣのグループとして、先のグレイ教授の指摘するものに加えた

いと考える。

レジャー、レクリエーションという、ふたつの外来の片仮名文字が、深い考慮も払われないうまゝ安易に用いられていて、何の疑義もさしはさまないところにも、いわば流行という名のバスに乗りおくれまいとする日本人の心情に因るものであるかも知れないが、われわれは更にこの二字の持つ内容や意義、価値を明確に把握し、真剣に論議を進めるべきだと思う。

レクリエーションとなるべき7つの要因、条件をあげて、それを理解すべきだと、私は考え唱えて来たが、その考え方についてさへ、もっと遊動的でありたい、殻を破りたいと念じつゝも、たゞ非力を嘆ずるばかりで、諸先輩の教示を待つばかりである。

同様にレジャーについても、ある人は更にレジャーⅤ、Ⅵを追加することが妥当であると発言することを期待する。こうした努力がなされてこそ、昨今のようなレジャー、レクリエーションに対する文字の用法、解釈の混乱が解消されるのではないだろうか。私はその日が一日も早く実現することを待っている。

(引用文献)

Gray and Pelegrino 共編

“Reflection on the Recreation and Park movement”

Wm.C.Brown Co. 1973

に載録された“*This Alien Thing Called Leisure*” by D.E.Gray.